

取組実績の概要（2 ページ以内）

宮崎国際大学は、開学以来、国際的リベラル・アーツ教育を軸に、ほぼ全ての授業を英語で行い、またアクティブ・ラーニング（以下、AL）を導入している。これまでの取組では、効果的な AL に必要なクリティカル・シンキング（CT）の技能をはじめ、AL による学修成果を可視化する客観的な測定・評価が不完全であり、また AL をさらに発展させるための物的資源の環境整備が整っていない等、不十分な点があった。そこで、本事業では、下記の 4 つの取り組みを展開し、本学教育のさらなる質向上を目的とした。

- ① 従来の AL をさらに発展させ、ベスト・プラクティスの内容を明確化し、ルーブリック・ベース・シラバスによる PDCA サイクルを確立
- ② CT を客観的に測定・評価するツールの開発
- ③ ②の開発に伴う英語スキル向上を目的とする AL プログラムの構築
- ④ e ポートフォリオを用いた学修成果の可視化

【必須指標の達成度】

数値目標項目	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
アクティブ・ラーニング（AL）を導入した授業科目数の割合	79.4%	100%	100%
AL 科目のうち、必修科目数の割合	86.6%	95%	90%
AL を受講する学生の割合	100%	100%	100%
学生 1 人当たり AL 科目受講数	12 科目	14 科目	15 科目
AL を行う専任教員数	43 人 (100%)	53 人 (100%)	40 人 (100%)
学生 1 人当たりの AL 科目に関する授業外学修時間	8.4 時間	36 時間	12.8 時間
退学率	8.8%	1%	3.4%
プレースメントテストの実施率	100%	100%	100%
授業満足度アンケートを実施している学生の割合	76%	100%	61%
授業満足度アンケートにおける授業満足率	63.5%	92%	72%
学修・生活実態調査の実施率	76%	100%	60%
学修到達度調査の実施率	92.6%	100%	90%
学生の授業外学修時間	10.6 時間	36 時間	12.8 時間
学生の主な就職先への調査	無し	実施	実施

- ① 従来の AL をさらに発展させ、ベスト・プラクティスの内容を明確化し、ルーブリック・ベース・シラバスによる PDCA サイクルを確立

平成 27 年度に 33 の AL 手法を確立し、5 つのカテゴリーに分類した。その内容は論文で本学の宮崎学園図書館学術リポジトリに掲載している。平成 30 年度、学生グループが冊子「AL に効果的に取り組むための学生の心得」を作成した。AL の授業に対する効果的な受講方法、予想される困難とその対処法、得られる学習効果等が学生の視点でまとめられ、本事業の効果は学生にも確実に波及した。平成 30 年度から令和元年度にかけて、CT と英語力に焦点を当てた AL の指導事例を全教員から収集して「アクティブ・ラーニング事例集」の日本語版と英語版を作成し、冊子とホームページで公開した。これらの情報を本学の多くの外国人教員と日本人教員が共有することで、本学の AL 手法の実践力が強化され

た。令和元年度に学生アンケートによって英語スキルに対する AL 手法の効果の検証を行った。その結果、学生にとって学びやすい最適な AL 手法（ベスト・プラクティス）、また、7つの CT 要素に対する AL のベスト・プラクティスを見出すことができた。

平成 29 年度に、5つのディプロマ・ポリシー（DP）にそれぞれ 8つの DP ルーブリックを設け、計 40 項目の DP ルーブリックを作成した。教員は担当授業で受け持つ DP ルーブリックを決め、シラバスでそれを学生に周知させ授業を行った。授業科目毎の DP ルーブリックを集約し、DP に基づいたカリキュラム・マップを作成した。令和元年度には、ラーニング・マネジメント・システム マハラに DP の達成度を学生の自己評価と成績評価の両面から測れる機能を付与し、学生自身が e ポートフォリオでそれをチェックできる体制を作った。さらに、PDCA サイクルの見える化とその充実を図るため、卒業する学生に対し DP の達成度を記したディプロマ・サプリメント（学位証書補足資料）を作成し、令和元年度の卒業式で初めて学生に授与した。本事業で構築した e ポートフォリオとカリキュラム・マップの導入により、PDCA の Check にあたる自己評価・客観的評価体制を構築することができ、学生および教員の PDCA 教育システムとしては一定の形が完成したと言える。

② CT を客観的に測定・評価するツールの開発

平成 26 年度から始まったクリティカル・シンキング・アセスメント・テスト（CAT）の開発は、テネシー工科大学が中心となって開発された既存の CAT の活用の断念から本学独自の CAT の作成が始まり、初版、第二版と改定された後、平成 28 年度に現行版（第三版）が完成した。本学 CAT は 26 問の質問（英語）で構成され、4 択形式となっている。同テストは平成 28 年度～令和元年度に国際教養学部 1 年生と 3、4 年生に対して実施され、その結果、得点分布が正規分布を示し、テストの難易度が中程度であり、テストの平均点は学年進行とともに上昇し、CT 能力が経年で向上していることが分かった。この結果、本テストの客観的測定・評価能力が証明された。

③ ②の開発に伴う英語スキル向上を目的とする AL プログラムの構築

平成 29 年度には国際教養学部の教員 27 名の担当授業について、AL 使用頻度を「毎回、週 1 回、月に数回、学期中に数回、ほとんど用いない」の 5 段階に分けてアンケート調査を行った。また、令和元年度には英語スキルに対する AL 手法の効果の検証を 115 名の学生に対するアンケート調査で行った。その結果、学生にとって学びやすい最適な AL 手法（ベスト・プラクティス）を見出すことができた。その成果をもって、令和元年度に「宮崎国際大学英語教育セミナー：小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表」を開催した。ここでは小中高の英語教育担当者による AL による英語教育の事例発表が行われ、本学教員は AL の模擬講義を行なった。本セミナーは、本学が推進する AL 手法を地域の小学校、中学校、高等学校に波及させることに貢献した。

④ e ポートフォリオを用いた学修成果の可視化

平成 26 年度にラーニング・マネジメント・システム「マハラ」を活用した e ポートフォリオ・システムを構築し、平成 27 年度には e ポートフォリオ・センターを開設、購入したタブレット端末 245 台を学生に貸与し、その使用と e ポートフォリオに関するオリエンテーションを実施して e ポートフォリオの活用を推進した。その後も必要に応じて全体オリエンテーションやグループ・個別指導を継続して行っている。e ポートフォリオの内容は、当初は 1 年間の振り返りを行うためのものだったが、その後、語彙力や TOEIC の点数などの英語力を学生自らが管理し振り返るページや留学報告のページが組み込まれ、さらに、平成 30 年度には 3 年次のまとめページ及び 4 年次の卒業論文ページも組み込まれた。また、令和元年度には、DP で定められた学修成果を可視化するためのレーダーチャートなども組み込まれ、e ポートフォリオは、入学から卒業までの 4 年間、学生が自らの学修を主体的に管理・推進するツールとなっている。また、リベラル・アーツ入門、世界市民、ICT 入門、キャリアデザイン、および一部の英語の授業では、e ポートフォリオに授業課題をアップロードして、授業も行われており、これらにより、学修成果の可視化という点でも e ポートフォリオはその成果を発揮している。